

# 運動を楽しむ力をもった子どもを育てる

## ～「運動の楽しさを広げる3つの対話の充実」を通して～

渡辺 圭

体育科の目標が「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる」ことであることから、体育における「学び」とは、ある運動の取り組みを通して、その運動を楽しむ力をつけていくことと考える。

本稿は「運動を楽しむ力」を①できるようにする力、②仲間とかかわり合う力、③運動の楽しさを知り、さらに楽しむために工夫していく力ととらえ、この3つの力が、自己、他者、対象の「3つ対話」に取り組むことよって育てられると仮定し、実践（1年生「体づくり運動 多様な動きをつくる運動」）したものである。

なお、ここで述べる「3つの対話」については、佐藤氏が提示する対話的学びにおける三位一体論に基づき取り組ませた。そして本研究の「3色のカード」とは、この「3つの対話」を子どもたちが実感できるようにしたものである。

キーワード：小学校、1年生、体づくり運動、多様な動きをつくる運動、対話、3つの対話

### 1. 研究目的

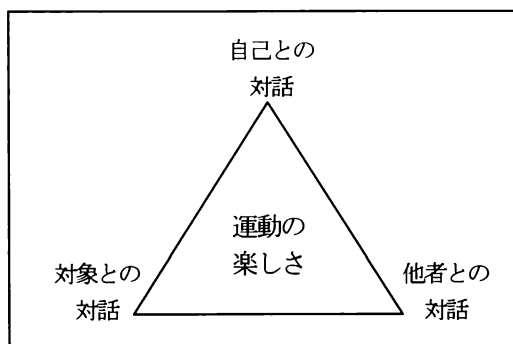
1年生は、体育を就学前の経験から、勉強の時間というより運動（遊び）の時間と捉えがちである。そこで、体育にも国語や算数と同じように「学び」があり、学ぶことで運動がもっと楽しくなることを実感させたいと考えた。

本研究では、子どもたちが体育における「学び」を実感できるような「3つの対話」の取り組み方と、「学ぶことによる運動の楽しさの広がり」を実感できる方法を探っていく。

#### 1.1. 体育における「学び」

体育科の目標である「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる」ためには、運動を楽しむ力が必要であることから、体育における「学び」とは、運動を楽しむ力を育てるものであると考えられる。そして「楽しむ力」とは、運動への意欲や興味が持続するような「楽しさを広げる力」であると考えられる。

また松田によれば「運動は『1つの固有なおもしろい世界』であるから、運動の世界の三角形の頂点になっている『自己』『他者』『モノ』のどれかを内側から伸ばすことができれば、三角形自体が広がり、面積も大きくなる、つまり子どもにとっての運動が広がり、深まることになる。」としている。この視点に立ち、本研究では「自己との対話」「他者との対話」「対象(モノ)との対話」という3つの対話の充実によって運動の楽しさ(=三角形)を広げていくことが体育における「学び」であるとした。(図1)



(図1：運動の楽しさを形づくる3つの対話)

#### 1.2. 体育における3つの対話

岡野、伊藤らは体育における3つの対話を次のように捉えている。

自己との対話 (身体技法の形成)	自らの体そのものを道具として「運動の中心のおもしろさ」に参加するために使用する 方法。
他者との対話 (仲間との課題の探究)	単元で取り上げる運動の文化的な価値を明らかにし、それに伴う身体技法から導き出された課題を仲間と探究する営み。道徳主義的な仲間とのかかわりを指すものではない。
対象との対話 (運動世界への参加)	「運動の中心のおもしろさ」に参加すること。文化遺産としての技を獲得する行為ではない。

(表1<sup>1)</sup> 体育における学びの三位一体)

これらを参考に、本研究では「自己との対話」を「できた」「もうすこしできそう」など体を通して技能が

身についたことを実感すること、「他者との対話」を「教え合い」「競い合い」「楽しむためのルールづくり」など課題解決のため友だちとかかわり合うこと、「対象との対話」を「やってみて楽しい」「こうするとおもしろい」など運動の特性に触れたり広げたりすることとした。

## 2. 研究方法

### 2.1. 「3色のカード」の活用

3つの対話を意識して運動に取り組ませ、気づいたことや感じたことを「3色のカード」(表2)に記入させる。

カードの色	ピンク色	黄色	水色
対話	「自己との対話」	「他者との対話」	「対象との対話」
記入する内容	「できたこと」「もうすこしできそうなこと」など	「友だちとしたこと」「教えてもらったこと」など	「場所や動きの工夫」「～したら楽しかった」など

(表2: カードの色と対話, 記入する内容)

記入したカードは、3色を頂点とする三角形になるように体育館に掲示する。(図2)単元が進んでいくにつれ、カードが増え、三角形が大きくなっていく様子は、子どもたちに運動の楽しさの広がりを実感させられると考える。



(図2: カードの掲示)

授業のはじめと終わりには必ずカードを交流する機会をもつ。(表3)

	学習活動
はじめ	前回に書いたのカードの紹介を聴く。 現在の三角形の形(色の偏り)をみて気づいたことを発表する。
終わり	今日のカードの発表する。 発表を聴いて、質問をする。

(表3: カードを活用した学習活動)

そして、子どもたちには、運動→カード記入→カードの内容を共有→運動…の取り組みを通して、楽しみを広げていくという学ぶ筋道を明確に捉えさせたい。

また一人ひとりのカードは、時系列で整理する。友だちとのかかわり、場や動きのアイデア、取り組んでいることなど、書かれた内容、カードの色から、グループや個人をみとり、毎時間の支援にいかしていく。

### 2.2. 白いカードとポストの設置

3色のカードの他に、白いカードとポスト(図3)を設置する。この白いカードには「こまったこと」「なやんでいること」を記入させる。運動に取り組む中で生じる、友だちとのトラブルやできない悩みなどに応えるためである。



(図3: 白いカードを入れるポスト)

書かれた白いカードの内容については、個人的な支援だけでなく、必要に応じて全体で共有し、「運動の楽しさの広げる」課題として解決をめざすようにする。

### 2.3. グルーピングと場の設定の工夫

単元の前半は「全ての場」を経験できるように、グループで場を順にまわって活動させようと考えた。

その際のグルーピングとして、まず同じ立場で運動に取り組めるよう、体力テストと運動の様子を参考に、ペアをつくった。そして、教え合って高まる仲間づくりのために、異なる体力のペアを組み合わせ、6人のグループをつくるようにした。

そして、単元の後半には、自分で場や運動を選んで、活動するようにし、「友だちとのかかわり」「場や動きの工夫」などがより広がっていくことをねらった。

場の設定については、単元のはじめに「単純な動きと場のみ」を紹介する。考える余地を残すことによって子どもたちが、活動をする中で、動きや場の工夫(対象との対話)をよりしやすくなると考えた。子どもたちの記入した水色のカードをもとに、動きの紹介や場の変更をしていくが、場によっては、同じ種類の運動でも「難度の異なる場」を設定し、個々に合った運動や「できるよこび」が味わえるように注意しながら場を変更していく。

### 3. 授業の実際

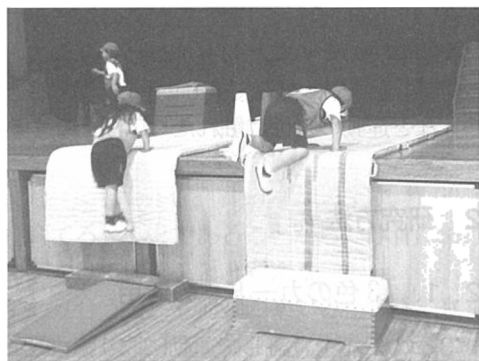
#### 3.1. 単元

「体づくり運動・多様な動きをつくる運動遊び」を6月と10月に各8時間で行った。運動の内容は表4の通りである。

	主な運動の内容
6月	<p>(ア) 体のバランスをとる運動遊び</p>  <p>(図4：平均台わたり)</p>  <p>(図5：ぐらぐらボックスわたり)</p> <p>(イ) 体を移動する運動遊び</p>  <p>(図6：ダンボールとび)</p>  <p>(図7：イルカジャンプ)</p>

10月

(イ) 体を移動する運動遊び



(図8：とびのりステージ)



(図9：ターザンロープ)

(エ) 力試しの運動遊び



(図10：おしずもう)

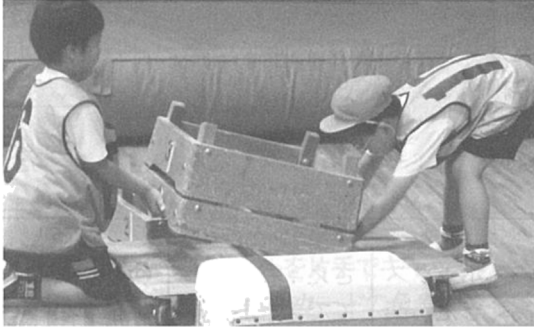


(図11：ぞうきんすべり)

(表4：運動の内容)

### 3.2. 場や動きの工夫を引き出す手立て

単純な場を提示するだけでなく、場の工夫を考えやすくするために、できる限り自分たちの手で場の準備をさせた。(図12)



(図12：場の準備)

授業の中で、子どもたちは器具の数や高さの変更、新しい道具を追加していった。例えば6月の実践では、「とび箱から」のとび降りが、「ステージから」になり、さらに「ボールがぶら下がった場」へと変わった。

また動きの工夫については、後述するカードの発表だけでなく、その動きの写真を体育館の壁に掲示し、授業の初めに見る時間をつくった。(図13)それにより写真の真似をして取り組む姿が多く見られた。また「素敵な1枚」として、特に良かったものを全体で紹介することも子どもたちが新しい動きを工夫する意欲につながっていった。



(図13：体育館に掲示した写真を見る)

そして、単元後半の自分で場を選び取り組むなかでは、ひとつの場で何度も取り組み、新しい動きを見つけたり、できるようになったりした。また異なる友だちと一緒に活動できることも動きや場を工夫する意欲につながった。

### 3.3. 「3色のカード」と「白いカード」

授業の終わりには、活動の感想を「3色のカード」に書いた。(図14)



(図14 カードの記入)

色の選択が難しい子どもには、書く前に何色に書くか聞きにくるようにした。初めは半数近くが聞きにきていたが、単元が進むごとに自分で色を選択し書けるようになった。そしてその時間のまとめとして「全体で共有させたい内容」を書いた数名を指名し発表させた。(図15)



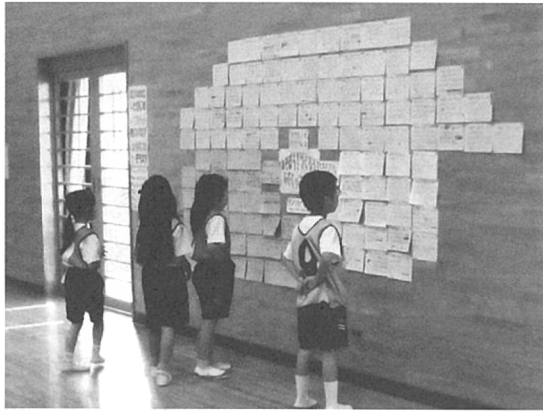
(図15：カードの発表)

授業後には個々のカードを整理し、次時の場の変更や声かけなど支援の手立てとした。表5はその例である。

カードの色と内容	支援(場の変更・声かけ)
ピンク色…ステージにもうちよつとで上がる。	上がる友だちにコツを聞いてみたり、見せてもらったりしよう。
黄色…ターザンロープでどっちが遠くへ降りられるか競争したよ。	普通のマットから、目盛り付きのマットに変更。
水色…ぶらさがっているボールを2個にして二人でしたら楽しそう。	ボールを1個から2個へ変更。

(表5：カードの内容と支援)

また、体育館に掲示してあるカード(図16,17)を見て「黄色が少ないね」「三角形めっちゃ大きくなって」などの声が出た。友だち同士でも「私、水色をまだ書いたことがないよ」「ぼくはピンクしか書いたことがない」とカードについて話をする姿も見られた。



(図16：体育館に掲示した3色のカードを見る)



(図17：第4時～第6時の3色のカード)

「白いカード」については、できないことや友だちとのかかわりの悩みについて書く子どもが多かった。中でも「ひとりでさみしかった」という内容があったときには活動の前にカードを紹介し「どうしたらいいかな？」を子どもたちに問いかけた。子どもから「ひとりの子がいたら一緒にしてあげる」という反応があり、その時間は、友だちとのかかわりを書く「黄色のカード」を選ぶ子どもがたくさん見られた。

## 4. 授業の考察

### 4.1. 「3色のカード」について

子どもたちにとっては、カードの存在が個々の課題意識につながったと思われる。前の時間に友だちが書いたカードの内容から、今日の自分の課題を見つけ、取り組んだことが見受けられたからである。(表6)

ピンク色		
あゆみ：ぐらぐらボックスわたりを走ってできたよ		
<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <span>↙</span> <span>↓</span> <span>↘</span> </div>		
水色	ピンク色	黄色
ひろ：ボックスを高くしたら楽しそうだな。	さえ：私も走ってできたよ。	ゆうじ：二人で手をつないでわったよ。

(表6：カードのつながり)

また、子どもから工夫が出にくくなった時などには、カードの内容から、新しい動きや場の工夫の提示を指導者が行うこともあった。(表7)

T	この前の時間、りあんちゃんは黄色のカード(図18)になんて書いてくれたかな?
りあん	ターザンロープをしながら、みきちちゃんとじゃんけんしたよって書きました。
(図18)	
T	みきちちゃん、やってみてどうだった?
みき	とってもおもしろかった。
T	そっかあよかったね。他にもした人はいるかな…まだやっていないの子いるね。みんなもやってみてね。
	それとりあんちゃんのカードを見て思ったんだけど、どうやってじゃんけんしたの?
りあん	どうって、(手で) こうやったんだけど。
T	じゃあ、みきちちゃんロープは?
みき	こう、片手でにぎって…
T	すごい!片手でできるんだ!できる人は他にもいるのかな?
かずと	そんなの、かんたんだよ
たける	おれもできる!
T	なるほど。そう思って先生、ペットボトルを用意してきました。どうするとおもう?
あすみ	投げるの?
T	これを途中で置くから、片手をはなして取ってみてね。でもロープを持つ方はしっかりとにぎっていてね(図19)

(表7：カードから新しい動きや場を提示)

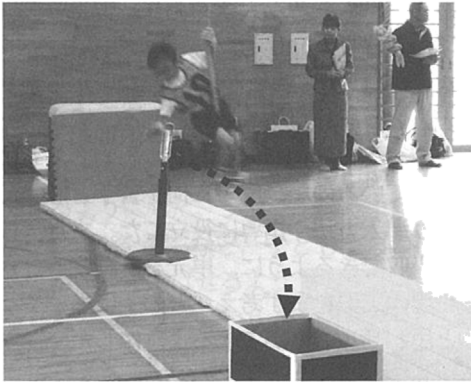


(図19：ペットボトルを片手でキャッチ)

一方、指導者にとっては、カードの色や内容を整理することで、より明確な個人、グループのみとりと支援を行うことを可能にした。例えば「黄色のカードを1枚も書いていない子」「グループのカードの中に名前が出てこない子」には、友だちとのかかわりに何かしらの問題があるとして、個人やグループに支援を行うことができた。

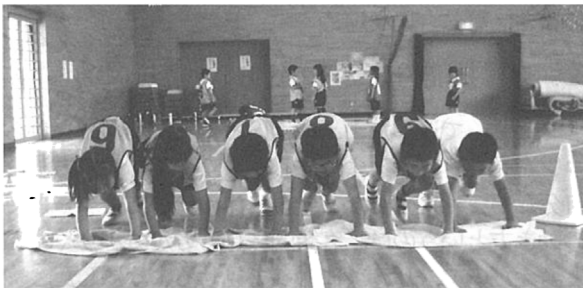
#### 4.2. 場や動きの工夫について

自分たちの思いが実現し、場が変わったり、道具が増えたりしていくことを子どもたちはとても喜び、飽きることなく、意欲的に運動に取り組んだ。(図20)



(図20：ターザンロープしながらキャッチ&スロー)

また、一人ではできない動きを友だちと楽しんだり(図21, 22)できなかった動きが身についたりすることを喜ぶ様子も見られた。これらから、単元を通して子どもたちは運動の楽しさが広がっていくことを実感できたと思われる。



(図21：友だちと並んでぞうきんがけ)



(図22：友だち2人とぞうきんすべり)

しかし「子どもの思い」に偏りすぎた場の変更になり、時には指導者の求める動きが制限されてしまう場面もあった。子どもたちの目を、もっと「動きの工夫」に向けさせる手立てが必要であった。

また、10月に行った実践は、場が多すぎたと感じている(5つの場)。指導者が声かけに回ることで、子どもの活動を把握することが、非常に困難であった。また、子どもたちにとっては、場の数が、取り組む動きを多様にさせ、一つひとつの場や動きに向き合いにくくさせてしまった。

#### 5. 成果と課題

1年生の子どもたちは、「運動を楽しむ力をつける」という体育における学びを「3つの対話」「3色のカード」によって実感できたと思われる。「できるようになって楽しかった」「友だちと一緒にして楽しかった」「場を工夫したら楽しかった」と子どもたちが感じたことは、今後、子どもたちが主体的に体育に取り組む基盤となっていくと思われる。

また指導者の立場からもこのカードは、子どものみとりと支援において、非常に有効であった。毎時間、より明確な支援の手立てをもって授業に臨むことが可能になった。

課題としては、他の学年や領域での「3つの対話」「3色のカード」の取り組み方である。今回は1年生の「体づくり運動 多様な動きをつくる運動遊び」で取り組んだが、学級の実態や、子どもの発達段階や領域ごとの運動の特性に応じてこれらは、変更していくことが不可欠である。本実践をもとに、今後も多くの実践を重ね、検討しながら、各学年、領域における活用方法を探っていくことが今後の課題である。

※松田恵示 山本俊彦(2001)「かかわりを大切にした小学校体育の365日」教育出版株式会社。

※「体育科教育」編集部(2011)『体育科教育2011.06 体育における「学び」の三位一体』大修館書店